

Smile to again～笑顔をもう一度～

瑞樹レオ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「もし、あの時違う行動をしていたら、何か…変わったのかな…」

「もし、あの時違うことを言っていたら、何か…変わったのかな…」

悲しく、そして辛い過去を背負ってきた4人が、運命的に出逢う。

果たして、彼女たちは心からの笑顔を取り戻せるのか。それとも…。

ここは、全国に存在する高等学校の中でも特に埋もれている「時代之ヶ丘学園」。

ちよつと前まで中学生だった少女たちが期待に胸を膨らませ、入学した。

学園自体が人気の少ないところにあるためか、全校生徒は80人程。

入学したばかりの少女・織野田姫奈のハイスクールライフが今、始まる！

目次

## 第壱話 「変?」

青空の中に光る太陽の日差しを感じながら、二人の少女は登校する。

「ねえ、やっぱりこの学校…普通とは違う気がするんだけど」

おのだひめな織野田姫奈は気持ちよさそうに両腕を頭の後ろで組む。

「はい?変…:といますと?」

「え、嘘!笑美里えみりつてば、もしかして気付いてないの?」

「??」

頭上にたくさんの『?』を浮かべ苦笑いをするのは、渡瀬わたせ笑美里。お姫様カツトの髪の毛が印象的な少女だ。

「いい?まず、学園の名前の中に『時代』つて入ってるのが何かひっかかる!そんなのわざわざ学園名に入れるものなの?それから、何と言つてもこの校舎!ザ・和風つて感じなんですけど!なのに、建物内は普通に洋風つていうね。はじめて来た時は『はあ!』つてなったよ」

一気に言いたいことを言つてので、呼吸が荒くなっている隣の友人に笑美里は優しく微笑みかける。

「この数日間でそんなにたくさん思うことがあつたのですね。ですが、姫ちゃん。学園名も校舎も、もう変えようのないものですから、わたくしたちがあれこれ言つても仕方がないのではないのでしょうか?それよりも、わたくしは学園の良いところを見つけてみたいです」

「笑美里、なんかズレてるよ?…まあ、でもそうだよね。悪いところより良いところを見つけるほうが良いよね」

二人は笑いあつた。

そうこうしているうちに昇降口まで来ていた二人は、そこで立ち止まった。

「姫ちゃん?靴箱はこちらですよ」

「あー、ごめんごめん。クラスの確認してた。たまにあるんだよねー、ド忘れ」

あはは、と笑いながら笑美里のところまで駆け寄る姫奈。

「分かります。ありますよね、そういうことって」

「一応確認しとくね。あたしが1年E組で、笑美里がA組だよね」

「はい、あつてます。明日からは確認しなくても入れるといいですね」

「うん、そうだね。あつ、あたしこっちだから！じゃあね！」

大きく手を振る姫奈を笑美里は何か言いたげな目で見つめる。

「ん？どうしたの？」

「あ、いえ！なんでもありません」

笑美里は、慌てたように首を横にブンブンと振った。

姫奈の後姿を見えなくなるまでじつと見ていた笑美里は、ゆっくりとうつぶむいた。

「わたくしにとつて姫ちゃんは、かけがえのない存在。ですが、姫ちゃんにはわたくしのことをどう思っているのでしょうか…。姫ちゃんはどうなたに対しても優しい。それはとても素晴らしいことですのにな、どうしてわたくしは『嫉妬』などという醜い感情を持つてしまうのでしょうか…。」